（18）ESD 教育部会

教育部会名	ESD
部会長名／作成者名	稲原美苗

概　　要（2 ページ）

（１）組織・運営について

・部会構成、実施体制など

令和 5 年度は 14 名の教員体制で部会の運営を行った。ESD 総合コーディネーターを中心に、授業担当者・ESD コース担当職員の協力のもと、すべて対面での授業を行なった。ESD はすべての科目がアクティヴ・ラーニングを特徴としており、関連する科目の多くでは、多くの授業枠の中でグループディスカッションを通した対話を促進している。グループディスカッションのサポートとして TA・SA を配置した。

（２）実施状況について

・開講科目、カリキュラムなど

第 1 学年を対象とする科目は、「ESD 基礎」（第 2Q）、「ESD ボランティア論」（第 2Q）、「阪神淡路大震災と都市の安全」（第 2Q）、「ESD 論 A」（第 3Q ）「ESD 論 B」（第 4Q）、「ESD 生涯学習論 A」（第 3Q）「ESD 生涯学習論 B」（第 4Q）である。

第 2 学年対象科目は、「ESD 基礎 B」（第 1Q）「阪神淡路大震災 B」（第 1Q）である。このうち、「阪神淡路大震災と都市の安全」と「阪神淡路大震災 B」以外は、「神戸大学 ESD コース」の ESD 基礎科目群に指定されている。

ESD 基礎科目では、カリキュラムのなかにフィールドワークによる持続可能な社会づくりへの接近の機会を設けており、フィールドワークを今年度はコロナ渦前と同等な形で実施することができた。フィールドへの導入として、フィールドワークを重視する全学や環境・開発・人権・福祉関係の教員や SD を推進する民間の方にミニレクチャーを担当していただきながら、出来るだけ座学とフィールドワークを組み合わせた経験学習を進めている。さらに、グループワークを通して、学生個々の「現実を認識する力・視座・枠組み」を学生自身がみずから再検討することで、ESD の学びの第一歩とするカリキュラム構成になっている。

・今年度の工夫・改善点

令和 5 年度は全ての科目を対面形式で行い、ほとんどの授業回で、学生同士のディスカッションの時間を設けた。TA・SA によるサポートや、対話を促進する授業内の様々な仕掛けにより、グループディスカッションが円滑に進んだ。また履修方法を見直し、昨年のガイダンス参加を前提とする履修登録から、うりぼーネットで行う履修登録（抽選）を実施に、履修者増につながった。

・現状と評価

第 2Q の「ESD 基礎」「ESD ボランティア論」、第 3・4Q の「ESD 論 A・B」「ESD 生涯学習論 A・B」、それぞれの科目の履修者数は前年と比較して大幅に多くなった。ESD 基礎科目の履修者の多さは、次の年に続く「ESD 演習（国際人間科学)」（第 2 学年以上、高度専門科目）の履修者の多さに影響すると予想している。また、ESD 基礎科目における ESD の定着度合いは、ESD 演習（国際人間科学）を進める学生たちの ESD の理解の深さや実践活動にも影響する。その意味で、ESD 基礎科目の履修者数を増やし、R6 年度に開講する ESD 演習（国際人間科学）における ESD への理解の深さをみることで、ESD 基礎科目が良い学びを提供していたかを問うことができる。したがって、学習効果は経年変化からしか評価できない部分もあると考える。ただし、学生からの評価が高いのは、ESD 部会が提供する科目の多くのが他学部の学生との交流を充実させている点である。それは、各授業における学生たちの反応や、リフレクションシートだけではなく、7,8 回目の授業で行われるリフレクション・ワークショップのなかで確認することができた。こうした知的交流の機会としての重要性は引き続き授業の要素と

して引き継いでいきたい。

（３）課題について
・教育部会及び教養教育院における今後の課題
　１つ目に、ESD コースの特徴のひとつであるフィールドワークの質の維持である。地球規模の課題と自身のつながりを意識することが ESD において重要であるが、地球規模の課題を意識できるようなフィールドワークの質と量の確保が困難になってきている。コロナ禍を経てこれまで社会課題に向き合い実践していた様々なフィールドやそれを支えるネットワークが分断され、量・質ともに低下縮小しており、その傾向がより顕著に表れている。フィールドワークと座学の往還の効果を高めるためには、学内の講義だけでなく、良質な学外のフィールドの確保が課題であり、そうしたフィールドの発掘には ESD 総合コーディネーターだけでなく、外部のステークホルダーによる仲介が必要ではないかと考える。
　２つ目に、これまでと同様に、他の部会の授業にも ESD に関連しているものと連動した新しい教育領域としての発展を望みたい。持続可能な開発の推進と深く関連する ESD を神戸大学のユニークな教養科目として展開することは、SDGs と SDGs を超えた先の目標の達成にも影響すると考えられる。本部会の担当教員はもとより、他部会の ESD 関連科目を行っている教員と、神戸大学 ESD コースの授業担当者のネットワーク形成が、ESD 総合コーディネーターを通して進められることが望ましい。
　3 つ目に、ESD コースはコース内の授業を経年で履修することでより深い理解を得る設定であるが、教養科目でもあるため、単体で科目を履修する学生も多く、全体の授業設計や位置づけの見直しが必要と思われる。

（４）総合所見
・全体としてのまとめ
　ESD の学習プログラムの根幹となっているフィールドワーク（体験）と座学の往還ができるようになったが、フィールドワークの少なさから、ESD の知識のみが深まっていくことへの懸念は今年度も継続した。アクティヴ・ラーニングの授業運営、知識を行動につなげうる良質なフィールドワークの可能性を探ることが次年度も目標になる。一方、履修数を増やすための履修の仕組み変更により、履修生増につながったが、クォーター制により、授業の構成が難しくなっている。少ないコマ数で各授業のねらいを実質化するための工夫が求められる。特にフィールドワークやスタディツアープログラムを授業のコマで代替できず、授業枠に入れることが難しくなっている。これを解決するための具体的な方策が求められる。
ESD に深く関心のある学生と、極端に言うと、単位欲しさに気軽に受講する学生が、混在している。両者がミックスされた集団での授業の方法についてさらに具体的な対策が求められる。教育カリキュラムでそれを実現するのではなく、学生の自由な学びの展開に期待をする授業づくりも必要かもしれない。
SDGs を達成する手法として着目され始めている ESD は、多様な専門が出入りするプラットフォームとして機能することも期待されている。学生だけではなく、全学の教員が ESD に関与することを通して、持続可能な開発をめぐる学問の在り方を考慮する可能性が高まることも期待される。しかし、関係教員の数はじり貧状態で、リーダーシップを握る教員も固定化している。これは、ESD としての授業間の整合性・一貫性を生む上では効果的に作用した部分もあるが、学問をする場としては、各授業の個性とそれらの差異によって学生が迷い、批判的かつ創造的に物事を考えるようになる契機を削ぐものでもある。また、ESD 関係の科目を維持し、有効な学びが生まれるには、いうまでもなく多様な専門性の総合化が求められる。いかに担当教員の数を増やし、「弱い紐帯」のなかで教員コミュニティを活性化するかは、大きな課題である。ESD 教育部会の参加教員を増員するとともに、ESD や SDGs に関連する授業の増設に努めたい。

Ａ　組織構成と運営体制について

①基本的な組織構成が適切であり、実施体制・運営体制が適切に整備され、機能しているか（100 字程度）

神戸大学 ESD コースの専門委員を中心とした授業担当者組織となっており、持続可能な開発に関連した教員によって運営されている。また、総合コーディネーターの取りまとめを中心に、国連大学認定組織である「RCE 兵庫－神戸（ESD 推進ネットひょうご神戸)」の協力のもと、多様な実践現場に接続することも可能となっている。
根拠資料 教育部会構成員名簿、シラバス、神戸大学 ESD コース HP、RCE 兵庫―神戸 HP

Ｂ　内部質保証について

①学生を含む関係者等からの意見を体系的、継続的に収集、分析し、その意見を反映した取組を組織的に行っているか（100 字程度）

すべての授業においてリフレクションシートの記入を求めている。また、第２Ｑ の最後に提出する総合レポートや授業振り返りアンケート結果を踏まえて、第３、４Ｑ の授業の方法・内容を修正している。教員や TA が手分けをして学生とコミュニ―ケーションを図り、学びの質を点検している。
根拠資料 授業振り返りアンケート結果、各回のリフレクションシート

②自己点検・評価によって確認された問題点を改善するための対応措置を講じ、計画された取組が成果をあげている、又は計画された取組の進捗が確認されている、あるいは、取組の計画に着手していることが確認されているか（150 字程度）

授業のねらいの達成度を確認したり、問題点を改善したり、授業内容の微修正を行ったりするために、随時、総合コーディネーター、TA、授業担当者の間で「授業準備ミーティング」を実施している。期間中、週 4 時間、年間 60 時間かけて、ESD を実質化するための協議を行っている。フィールドワーク協力組織との間でも、フィールドワークが実施できるよう、協議を進めている。
根拠資料 各回の授業実施計画書、ESD 推進ネットひょうご神戸運営委員会議事録

③授業の内容及び方法の改善を図るためのＦＤを組織的に実施しているか（100 字程度）

②にあるように関係スタッフの間で、授業前後のミーティングを実施しているほか、関係教員が互いの授業を参観するピアレビューも実施している。
根拠資料 ピアレビュー資料

④教育活動を展開するために必要な教育支援者や教育補助者が配置され、適切に活用されるとともに、それらの者が担当する業務に応じて、研修の実施など必要な質の維持、向上を図る取組を組織的に実施しているか（100 字程度）

大人数の授業では、TA・SA のほか、ESD 基礎科目担当教員が協力してワークショップなどを実施している。ワークショップにおけるファシリテーションスキル研修など、専門の教員が授業以外のさまざまなプロジェクトで指導している。また、彼らはアクションリサーチの補助を通して実務のスキルを磨いている。
根拠資料 TA・SA 報告書

Ｃ　教育課程と学習成果について

①当該教育部会が提供する授業の目標が、全学共通授業科目の区分ごとの学修目標に対応したものとなっているか（100 字程度）

本部会の授業目標は、持続可能な開発という理想の実現に向けて、あらゆる人が主体となることができる教育的アプローチの意味を理解し、その実質化を図る力量を高めることにある。神戸大学モデルとされるグローバル社会において活躍し得る人材育成の中核を担うものとなっている。
根拠資料 シラバス

②授業担当者に共通目標や学部からの要請を示し、到達目標をそれに沿ったものにする配慮がなされているか（100 字程度）

主たる授業担当者が授業開講の前年度末に一堂に会し、目標に関するミーティングを行っている。本部会のねらいや ESD 概念について共通理解を図るとともに、具体的なシラバスを協働で作成している。授業間のつながりを担当者が意識するものとなっている。
根拠資料 シラバス、担当者会議議事記録など

③授業科目の内容が、共通目標や個々の到達目標を達成するものとなっているか（100 字程度）

すべての授業科目において、ESD を前提とする目標がたてられているとともに、各授業の固有の特徴が明示されている。とりわけ、クォーターの異なる授業間のつながりは授業担当者間で事前に協議され、学びの流れが作られている。
根拠資料 シラバス

④単位の実質化への配慮がなされているか（100 字程度）

簡単に単位が取れるというものではない。どの授業も毎回のリフレクションシートの記入と、フィールドワークに参加した場合には感想レポートが科せられる。また、最後には、講義と体験およびワークショップで得た知見をもとに、高度な論理展開力の程度が評価される。単位の形骸化はありえない。
根拠資料 シラバス、リフレクションシート、最終レポート

⑤教育の目標に照らして、講義、演習、実験、実習等の授業形態の組み合わせ・バランスが適切であり、それぞれの教育内容に応じた適切な学修指導法の工夫がなされているか（150 字程度）

本部会の授業は、いずれも、講義・ワークショップ（グループディスカッション）を重ね合わせたものとなっている。持続可能な開発という理念を、資料分析・ヒアリング・体験・討議を通して理解し、その経験の下に ESD 実践を構想する力量を高めることとなっている。教員と学生の対話、学生同士の熟議を促進するワークショップのツールがふんだんに用いられている。
根拠資料 シラバス、各回の授業実施計画書

⑥シラバスに、必須項目として「授業名、担当教員名、授業のテーマ、授業の到達目標、授業形態、授業の概要と計画、成績評価方法、成績評価基準、履修上の注意（関連科目情報）、事前･事後学修」及び「教科書又は参考文献」が記載されており、学生が書く授業科目の準備学修等を進めるための基本となるものとして、全項目について記入されているか（50 字

程度）

すべての授業において、上記事項については、ほとんど記載がなされている。しかし、「教科書又は参考図書」については、「授業中に指示されるもの」とされている。これは、授業が学生との対話のなかで展開する性質を反映したものである。
根拠資料 シラバス

⑦学生のニーズに応え得る履修指導の体制を組織として整備し、指導、助言が行われているか（100 字程度）

授業担当者または ESD 総合コーディネーターの連絡先は公開しており、電話やメールで随時連絡の取れる体制にある。また、授業後に時間を取り、履修の方法について、相談できるようにしている。学務部の職員も、個別に履修相談にのってくれており、学生の履修におけるニーズに応えられる体制にある。
根拠資料 シラバス、「神戸大学 ESD コース」HP

⑧学生のニーズに応え得る学習相談の体制を整備し、助言、支援が行われているか（100 字程度）

授業担当者または ESD 総合コーディネーターの連絡先は公開しており、電話やメールで随時連絡の取れる体制にある。また、学生と授業後の感想についてフランクに話ができるように配慮もしている。基本的に、授業中に自由に発言できる雰囲気を作り上げ、学生のニーズに応えるにしている。
根拠資料 シラバス

⑨成績評価基準及び成績評価方針に従って、公正な成績評価が厳格かつ客観的に実施されているか（100 字程度）

成績評価基準及び成績評価方針は、シラバスに明記している。また、BEEF＋を使ってレポートの整理をしている。すべての授業が複数の教員によって運営されており、成績評価は、その合議によって、数値化されたデータを元に行っている。
根拠資料 シラバス、成績分布（教養教育委員会資料）

⑩学修目標に従って、適切な学修成果が得られているか（100 字程度）

ESD の推進に必要な学修成果は、本学の ESD コース関連授業全体との関係のなかで評価されるべきであるが、多くの学生が、ESD の必要性と課題、現場での取組みの実態、ESD 実践の枠組みなどを、ESD 実践の基礎として理解していると判断している。
根拠資料 最終レポート、成績評価、授業振り返りアンケート結果